

## 《活動記録》

# 研究室における資料の調査・整理・保存

## 1. はじめに

本研究室では、資料の調査・整理・保存について取り組んでいるので、それについて記述し、記録することとしたい。

後述する通り、これまで本研究室では、筆者が直接関わった範囲でも、故仲新教授（東京大学教育学部教育史・教育哲学研究室所属）の所蔵にかかる資料、故春山作樹教授（東京帝国大学文学部教育学研究室所属）自身の手になる手稿、ノート等を含む『春山作樹教育論集』編纂刊行資料を、調査・整理・保存する取り組み等を行ってきており、その成果は、これまでの『研究室紀要』等で発表してきている。またこのたび教務補佐員を置いて、本研究室所蔵の資料を調査・整理する事業を行うこととなった。今回は、上記の諸事業を含めて、本研究室における、資料の調査・整理・保存活動について記述したい。

## 2. これまでの活動

### a. 勝田文書の調査・収集・整理

教育学研究科・教育学部図書室には、教育史・教育哲学研究室所属であった故勝田守一教授の所蔵文書が「勝田文書」として保存されている。これは教育史・教育哲学研究室所属であった堀尾輝久・元教授の教示により片上宗二氏、斉藤利彦氏（当時本研究室所属大学院学生）が調査を行ったもので、後に遺族から寄贈され、教育史・教育哲学研究室の所蔵から、さらに図書室に移された。これは戦後の公民教育についての重要資料を含むものであり、その観点から学界に紹介されている<sup>1)</sup>。日本の戦後教育史研究上の重要資料が、本研究室における師弟関係を前提としながら調査・整理・保存されたものと見ることができる。

### b. 仲新寄贈文書の調査・収集・整理

このような資料の調査・整理・保存の取り組みで筆者の直接知るものとして、故仲新教授所蔵資料に関わるものが挙げられる。これは仲教授の没後、そ

の後任であり、教育史・教育哲学研究室所属の教授であった寺崎昌男氏の仲介があって、遺族から寄贈されたものである。この資料には、筆者の知る以前から整理作業が加えられていたと思われるが、未完了のまま長らく教育学部一階の倉庫に保存されていた。これを寺崎氏の後任で、教育学研究室教授であった土方苑子氏中心にさらに整理を加えて、その成果を『東京大学大学院教育学研究科紀要』<sup>2)</sup>及び本『研究室紀要』<sup>3)</sup>に発表してきている。後者の解説によれば、寄贈された史料類は大別して「Ⅰ 教科書類」「Ⅱ 1949年東京大学教育学部創設に関する文書」「Ⅲ その他、日本教育史関係史料類」に分類される。そのうち、Ⅰ及びⅢの一部は教育学研究科・教育学部図書室に移管されており、またⅡは教育学研究科長室で保存されていると聞いている。

本資料の調査・収集・整理・保存には、故仲教授所蔵資料に、日本教育史の研究資料として貴重なものが多く含まれているという事情が働いていたと思われる。しかし同時に、本研究室の日本教育史研究者であるという関係が、寺崎昌男氏、土方苑子氏をはじめその他作業にあたった大学院生等にとって、調査・収集・整理・保存に着手・実行する際の事情に前提されていたと思われる。改めて、これらの資料自体及び資料の調査・収集・整理・保存事業を、本研究室の活動に関わるものについてのそれとしても意味づけてよいと思う。

### c. 『春山作樹教育論集』編纂刊行文書の調査・整理

次に、『春山作樹教育論集』編纂文書について、これは、前号の『研究室紀要』にも述べた通り<sup>4)</sup>、『春山作樹教育論集』の編纂刊行事業にあたって収集され・発生した資料であって、その事業のメンバーであった江森一郎氏のもとに集積・保存され、後に江森氏から土方苑子元教授宛に送付されたものである。この資料の中には、東京帝国大学文学部教育学研究室の教授であった春山作樹の自筆原稿やノート、春山作樹が行った講義の、学生によるノートなどが含まれている。

『春山作樹教育論集』の編纂は、もともと、本学教育学部出身で、当時名古屋大学に在職していた小川利夫を中心とした社会教育研究者が考えていたものであったが、教育史・教育哲学研究室所属の大学院生であった江森氏が、日本教育史の先行研究者としての春山に対する関心から、これに参加することとなった。そして、この『春山作樹教育論集』刊行事業には、春山の「後任」である、教育史・教育哲学研究室所属の故海後宗臣教授が参画しており、江森氏が参加したのも海後宗臣の誘いによるということである。またそもそも春山作樹の著作刊行は戦前、春山没後にも話が起ったことがあり、海後はそれにも関与していたようである。春山の自筆原稿はその際に収集されたものである可能性があるが、長らく教育学部図書室内の小部屋に保存されており、『春山作樹教育論集』編纂の過程で江森氏がこれを探索・発見したのも海後の教示によるということである。

春山は、東京帝国大学教授に就任する以前は、広島高等師範学校の教育学の初代教授であった。また日本教育史研究者であるのみならず、日本の社会教育研究の嚆矢とも位置づけられており、『教育学概論』『教育学講義』等の著書もある。また、『春山作樹教育論集』の編纂自体が一つの教育学（史）研究であることは言うまでもない。したがって、これらの資料は日本の教育学史研究上の資料として意義あるものである。また同時に、これらの資料は『春山作樹教育論集』の編纂とそれに関わる研究事業、戦前の著作刊行事業、及び春山作樹自身の研究活動という、三重の意味で（東京帝国大学文学部の教育学研究室にまで範囲を広げれば）本研究室の活動に関わるものであり、しかも、それらの諸事業とその関係に、本研究室における師弟関係や先後関係が前提されていると言える。

#### d. 研究室保存資料の調査

先にも述べた通り、2007年度より、『春山作樹教育論集』編纂刊行資料の整理事業について、教務補佐員である小林正泰があたることとなり、翌年度より吉田昌弘が、教務補佐員としてそれに加わった。これら二名はいずれも、大学院学生として仲新寄贈文書の整理にも関わっている。さらに2009年度からは、それを含めた研究室保存資料の調査・整理について、上記二名があたることとなっている。

当面、長年助手室に伝えられてきた資料や、その他研究室内に保存されている研究・教育関係資料などの調査・整理を進行している。2009年度は、先記の『春山作樹教育論集』編纂刊行資料の調査・整理の継続及び、大田堯・元教授関係の保存資料の仮目録化、を行った。後者の資料群の性格の同定、また個々の文書の詳細については、仮目録化の成果を用いながら、調査を進める予定である。またそのほか、研究室保存音声資料の仮目録化などを行った。

### 3. 今後の展望

以上、要するに、本研究室におけるこれまでのアーカイブ活動を記述してきた。これらは日本の教育史、日本の教育学史に関わる資料を収集・整理・保存するための活動として行われていたものであったが、しかし、それらは本研究室における師弟・先後関係を前提としつつ可能となったものであり、そして、同時に本研究室の活動に関する資料の調査・整理・保存ともなっている。これらの諸点が、本研究室においてアーカイブ活動を行う意義を示していると言える。すなわちこの活動は、日本の教育学史、教育史を研究するための基盤となるとともに、研究室の歴史を構成する基盤となる活動であり、同時にそれら自体を前提としつつ提示する活動である<sup>5)</sup>。

上記の諸点に照らして、今後必要と思われる点について列記してみたい。

当面、研究室では、研究室内に保存されている資料の調査・整理を行うこととしているが、でき得るならばより広範に、本研究室関係者及び本研究室における活動に関わる資料の調査・収集を行うことが望まれる。尤も、保存場所の関係から、大量の資料を受け入れることは、現状では非現実的である。当面、研究室外にある資料の散逸を防ぐという意味を含めて、関係する方々への調査などに着手することが望まれる。

また、研究室の事務関係資料については、筆者らは把握していない。歴代の助手・助教が管理しているはずの研究室事務関連の資料の保存については、事務を引き継ぐ教員が配慮されることを望みたい。

さらに、アーカイブ活動は、本研究科の他研究室についても取り組まれるのが望ましい。しかし研究室単位で取り組むことは、利点もある一方で限界も

ある。これまで、本研究室における資料の整理・保存活動については、教育学研究科・教育学部図書室との連携をとりながら行い、時に資料の移管を行ってきた。教育学研究科・教育学部図書室の規則<sup>6)</sup>には、「図書室に……図書、雑誌、視聴覚資料その他必要な図書室資料を備える。」とあり、上記の勝田文書や仲新寄贈文書の一部は「その他必要な」図書室資料として受け入れが可能となっていると思われる。現行の図書室の組織で、記録史料（アーカイヴズ）の調査・整理・保存・供用の体制を整えてゆくことは、図書室の組織人員や関係規則の基本構造にも関わる問題であるように思われる。図書室における基本的な体制整備か、あるいは可能であればアーカイヴの機能を担う組織が新たに教育学研究科レベルで設置されることが望まれる。

（吉田昌弘）

## 注

- 1) 片上宗二、斉藤利彦「わが国における戦後の公民教育関係文献・資料目録——「戦後教育改革期」資料を中心として——」『教育学研究』第48巻第4号、1981年
- 2) 土方苑子、仲文書調査会（辻直人、鶴殿篤、水崎富美、

小川智端恵、谷脇由季子、吉長真子、瀬川大、小林正泰、吉田昌弘）「仲新氏所蔵東京大学文学部教育学科／教育学部関係文書——教育学部創設文書を中心に——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第39巻、2000年

- 3) 土方苑子、瀬川大、吉田昌弘、加島大輔、池田雅則「仲新寄贈文書（分類A）目録および解説」『東京大学大学院教育学研究科 教育学研究室 研究室紀要』第34号、2008年
- 4) 吉田昌弘、小林正泰、菊池信太郎、土方苑子「春山作樹著作等関係資料目録——『春山作樹教育論集』編纂等関係資料目録——」『東京大学大学院教育学研究科 教育学研究室 研究室紀要』第35号、2009年
- 5) 大学文書館の意義、特に法人化を含めた近年の大学をめぐる動向の中での、各大学にとっての大学文書館の必要性については、例えば寺崎昌男『大学は歴史の思想で変わる』、2006年を参照。これに対し、研究室・研究科レベルでの小規模ながらよりきめ細かい取組みはさらに独自の意義をもつと思われる。
- 6) 「東京大学大学院教育学研究科・教育学部図書室規則」（平成13年6月20日制定、平成16年4月28日、平成17年9月21日改正（大学院教育学研究科・教育学部教授会承認））